2024年『讃岐典侍日記』

次の文章は『讃岐典侍日記』の一節である。堀河天皇は病のため崩御し、看病にあたった作者も家で喪に服している。そこへ、女官の弁の三位を通じて堀河天皇の父白河上皇（院）から仰せがあった。新天皇は、幼い鳥羽天皇（堀河天皇の子）である。これを読んで、後の設問に答えよ。

かくいふほどに、十月になりぬ。「弁の三位殿
このように言う間に、十月になった。（実家の女房？が作者に）「（鳥羽天皇の乳母の）弁の三位（＝
より御文」といへば、取り入れて見れば、
藤原光子）からお手紙（が届きました）」と言うので、受け取って（広げて）見ると、

ア「年ごろ、宮仕へせさせたまふ御心のありがたさ
「長年、宮仕えをしなさる（際のあなたの）御心構えの素晴らしさなどを、（鳥羽天皇の祖父である
など、よく聞きおかせたまひたりしかばにや、院
白河上皇が）よく聞いておいていらっしゃったからだろうか、白河上皇
よりこそ、この内にさやうなる人の大切なり、登時
から、『鳥羽天皇の御所にそのような人が とても切実に必要だ、すぐに
参るべきよし、おほせごとあれば、さる心地せさせ
出仕しなさい』ということの、ご命令があるので、そのような心づもりをしなさって
たまへ」とある、見るにぞ、あさましく、ひがめか
ください」とある、（それを）見ると、驚き呆れ、「見間違いか」
と思ふまであきれられける。おはしましをり
と思うほどまで自然と驚き呆れた。（堀川天皇が）ご存命だった頃から、このようなこと
より、かくは聞こえしかど、「いかにも御いらへの
（＝鳥羽天皇への出仕の要請）は（堀川天皇に）申し上げ（てい）たけれども、「どのようにも（堀川天皇
なかりしには、さらでもとおぼしめすにや、それ
の）お返事が無かったのは、『そうでなくても（良いのでは）』とお思いであったのだろうか、それなの
を、ィいつしかといひ顔に参らんこと、あさましき。
に、「早く（出仕したい）と言いたげな様子で（鳥羽天皇のもとに）出仕するようなことをしたら、
（我ながら）呆れることだ。

周防の内侍（すはうないし）、後冷泉院（ごれいぜいゐん）におくれまゐらせて、
（似た先例として、）周防の内侍（＝平仲子）が、（仕えていた）後冷泉天皇に御先立たれ申し上げて、（後冷泉天皇の弟で、次に即位した）後三条天皇から、七月七日に出仕しなさいということを、お命じになったときに、

後三条院より、七月七日参るべきよし、おほせられたりけるに、

天の川おなじ流れと聞きながら
天の川（の流れ）のように（後冷泉天皇と後三条天皇はご兄弟で）同じ血筋の流れだと聞いているけれども、

わたらんことはなほぞかなしき
（前の主とは異なる後三条天皇のもとに）出仕するようなことは、やはり悲しいこと。

とよみけんこそ、げにとおぼゆれ。
と詠んだ歌こそ、「もっともだ」と思われる。

「故院の御かたみには、ゆかしく思ひまゐらすれど、さし出（い）でんこと、なほあるべきことならず。
「亡き堀河天皇の御形見としては、（子である鳥羽天皇に）心惹かれて思い申し上げるけれども、（出仕するような）差し出がましいようなことは、やはりあってよいことではない。

そのかみ立ち出でしだに、はればれしさは思ひあつかひしかど、親たち、三位殿などしてせられんけれども、
昔、（堀川天皇のもとに初めて）出仕したときでさえ、（宮仕えの）晴れ晴れしい（ことに）は思い悩んだ『親たちや（姉の）三位殿（＝藤原兼子）などでしなさるようなことを

ことをなん思ひて、いふべきことならざりしかば、心のうちばかりにこそ、海人（あま）の刈（か）る藻（も）に思ひみだれしか。げに、これも、わが心にはまかせずともいひつべきことなれど、また、世を思ひ捨てつと聞かせ
（反対するのもどうか）』と思って、（あれこれ反対を）言ってよいことではなかったので、内心だけは、（海人が刈る藻のように）気持ちが乱れた（ことだった）。本当に、今回（＝白河上皇からの命令）も、「私の意志の通りにはならない」とも言ってしまうようなことではあるけれども、あるいは、「（私が出家して）世を捨ててしまった」とお聞きに

たまはば、さまで大切にもおぼしめさじ」と思ひ
としたら、（白河上皇は）それほどまで（私を）切実に必要ともお思いにならないだろう」と（出家するか
みだれて、いますこし月ごろよりももの思ひ添ひ
どうか悩んで）気持ちが乱れて、さらにもう少し、この数ヶ月よりも　悩みが増さった
ぬる心地して、エ「いかなるついでを取り出でん。
気持ちがして、　「（私は）どのような（出家の）機会を得ようか。
さすがに、われと削ぎ（そ）すてんも、昔物語にも、
さすがに、　自分で剃髪するようなのも、　昔の物語にも、
かやうにしたる人をば、人も『うとましの心や』
そのようにした人のことを、　人々も『いやな心（の人）だ』
などこそいふめれ、わが心にも、げにさおぼゆる
など言うようで、　私の気持ちとしても、本当にそのように（＝自分で剃髪するのは嫌な
ことなれば、さすがにまめやかにも思ひ立たず。
心の人だ）思われることなので、さすがに、本格的に決心することもしない。
オかやうにて心づから弱りゆけかし。さらば、こと
このようにして自分の心によって、さらに気持ちが弱っていけよ。　そうすれば、（心身衰弱を）言い訳
つけても」と思ひつづけられて、日ごろ経（ふ）るに、
にしてでも（出仕を断ることができる）」と思い続けられて、　数日が過ぎると、
「御乳母（めのと）たち、まだ六位にて、五位にならぬかぎり
「（鳥羽天皇の御）乳母たちは、（あなたとは違って）まだ（殿上人ではない）六位で、五位にならないかぎ
は、もの参らせぬことなり。この二十三日、六日、
りは、天皇の食事の世話が出来ない状態である。　この二十三日、六日、八日が（出仕するのに占い
八日ぞよき日。とく、とく」とある文、たびたび
で）良い日（です）。早く、早く、（出仕しなさい）」とある手紙を、　何度も（持ってこられて）
見ゆれど、思ひ立つべき心地もせず。
見るけれども、決心しなければならないという気持ちにもならない。

「過ぎにし年月だに、わたくしのもの思ひののち
「過ぎ去った年月でさえ、
は、人などにたちまじるべき有様にもなく、見苦し
私の一身上の悩みの後は、　人々の間に混じることができる様子でもなく、　見苦しく
くやせおとろへにしかば、いかにせましとのみ思ひ
やせ衰えてしまったので、　『どうしようかしら』　とだけ思い悩んだけれど
あつかはれしかど、御心のなつかしさに、人たち
も、　（亡き堀川天皇の）御心に惹かれて、（また、同僚の）人々などの
などの御心も、三位のさてものしたまへば、その御
御心にも（惹かれて）、（姉の）三位がそのままで（宮仕えを）続けていらっしゃるので、「その（姉ら
心にたがはじとかや、はかなきことにつけても、
の）御心に背かないようにしよう」などと思ったのか、ちょっとしたことにつけても、
用意せられてのみ過ぎしに、いまさらに立ち出で
気遣いをしてばかりで（月日が）過ぎたが、　今あらためて出仕して、
て、見し世のやうにあらんこともかたし。君は
（堀川天皇と）会った世のように過ごすようなことも難しい。　鳥羽天皇は
いはけなくおはします。さてならひにしものぞと
幼くいらっしゃる。　『そういう状態で（＝堀川天皇と特に親しい状態で）馴れてしまっていた者だ』と
おぼしめすこともあらじ。さらんままには、昔のみ
お思いになることもあるまい。　そのように（月日を）過ごすにつれて、（亡き堀川天皇との）
恋しくて、カうち見ん人はよしとやはあらん」など
昔のことだけが恋しくて、私をちょっと見かけるような人は、（私の状態を）良いとは思うだろうか、いや、
思ひつづくるに、袖のひまなくぬるれば、
思わないだろう」などと思い続けるうちに、袖が（乾く）合間も無く（涙で）濡れたので（詠んだ歌）、
キ乾くまもなき墨染めの袂（たもと）かな
（堀川天皇を偲んで涙で）乾く合間も無い、喪服の袂だなあ。
あはれ昔のかたみと思ふに
しみじみと昔の（亡き堀川天皇の）思い出（となる喪服）だと思うと。